

中斎塾 東京フォーラム 第9回講話

令和7年10月11日（土）

おはようございます。私は、本日2つ楽しみにしている事があり、ここへ参りました。

一つ目は、酒井さんが今日の論語素読で少し尖ったことを言うとメールに書いていた事です。酒井さんが久しぶりに尖ってみたいと言うので、どんなふうに尖るのかと楽しみにしておりました。

二つ目は、新聞の見出しについてです。高市さんが公明党から「縁を切る」と言われて困っている状況を、各紙はどのように報じるのか興味がありました。其々の新聞が一面をどのような見出しで伝えるのか、それを見るのが楽しみでした。朝日、日経、読売新聞の3紙を確認しました。

そのようなわけで、今朝はとても楽しみにしておりました。では、まず酒井さんのお話から入りましょう。

私は、この「女子（はしため）」という読み方が好きではありません。自分で読むときは「女子（じょし）」と「小人（しょうじん）」と読んでいます。しかし、今回のレジュメを見ると、わざわざ「はしため」と書いてあつたので、素読論語ではどう書かれているのか確認してみました。すると、そちらも「はしため」と書いてありました。これはもう仕方がありません。学者の先生方が書かれたものも、大体「はしため」になっています。恐らく皆さん苦し紛れにそう書いているのだろうと感じています。本来なら、素直に「女子（じょし）」としておけばよかったのにと思っておりますが、素読論語もそのようになっているのが現状です。

素読論語は、中斎塾フォーラムを立ち上げた際、フォーラムには事務局長がいました。彼はその分野の専門家でもありましたので、ルビの多くは事務局長が振りました。

本来、無理に「はしため」にする必要はないのですが、説明する際「はしため」の方が何となく理屈がつきやすかった為、やむを得ずその表現にしたのだろうと感じています。

私は家内と口喧嘩寸前になることはありますが、50数年の間で実際に喧嘩になったのは一度だけです。口喧嘩に発展する前に止めます。止める方法は簡単で、私が参ったと言えばそれで終わりです。明らかにこれ以上私が反論できないような事を家内が言い出した時は、私がスッと引き下がります。

女性と口喧嘩になると、丁々発止のやり合いは中々難しいものです。私も妻と口論になると、昔あなたはこうだった、とこちらが覚えていない過去の話を次々出されて太刀打ちできません。女性は昔の事を良く覚えていて、腹が立った事は忘れないと学者も言っています。記憶が曖昧な男性は反論しようがなく、時には“ないこと”まで言われている気がしても証明できません。

女性は相手の仕草をよく見ていて、都合が悪いと人が無意識に顔や体を触る癖まで見逃しません。出来かせを言うと目の動き一つでバレてしまう。総裁選でも投票の手の使い方で色々勘ぐられていきましたが、人の仕草にはそうした意味が隠れていますので、見つけられてしまうのでしょうか。女性の観察力は本当に鋭いのだと感じます。

男性への忠告としては、「無くて七癖」という言葉があるように、自分の癖に気をつけましょう。女性は、家計を支えてくれる相手を良く観察しています。男性が何か誤魔化そうとしていると、咳をしたり、耳や鼻を触ったりといった無意識の癖が出ます。女性はそれをすぐに見つけて、心の中の手帳に「この人はない事を言う時、こういう癖が出る」と記録しているのでしょうか。

孔子は、先程酒井さんが言った通り、余計な事を言ってしまった。私もそう思っています。お弟子さんたちは、孔先生が大事なことを言ったので記録に残さなければと、書き留めたのでしょうか。

「女子と小人は養い難し」という言葉も、孔子の心中がそのまま出てしまっただけではないでしょうか。本来なら女子と小人は付き合うのが難しい、扱いが難しいと書き残せばよかったです、「養い」という言葉を付けた為、対象が限定されてしまった。結果、後世の学者たちが「はしため」というような読み方をするようになってしまいました。

渋澤栄一もこの箇所について、孔子に代わって一生懸命抗弁しています。渋澤栄一は、論語を良く学び、日常に生かせば夫婦和合の道になり、夫婦が仲良くなれば一家団欒ができ、家族が和合になれば事業、自治体、ひいては国家もきちんと収まる、と臆面もなく言いました。公の席や後世に残る場では、こうした建前論を言わざるを得なかったのでしょうか。

何度かお話ししていますが、渋澤栄一は女性関係には問題のある人でした。二松学舎大学の舎長（今の理事長）をしていた時、学生から「渋澤栄一先生を心より尊敬申し上げております。大変素晴らしい業績を残しておられますが、女性関係の噂だけは気になっています。本当の所はどうなんですか？」と言われ、栄一は立ち上がって深々と頭を下げ、「女性関係については、お聞きになっている通りでございます」と素直に認めた、という話が残っています。

この時は、正妻と権妻が公に認められる時代でした。孔子の時代も同じで、身分の高い者には正妻の他に女性が何人もいました。江戸時代の大名でも、家を絶やさない為に多くの子どもを作らねばならず、妾が沢山いたものです。明治時代も、奥さんと妾（権妻）が同じ家にいてもおかしくありませんでした。

こうした事情から、渋澤栄一は至るところで女性に手を出してしまう人で、奥さんには平身低頭せざるを得なかった。家族をまとめるために、渋澤家の家訓を苦しまぎれに作ったのもその為です。

ですから渋澤栄一はどの口で夫婦和合を語るのだと思ったわけです。酒井さんにはぜひ後で、渋澤が苦し紛れにいろいろ弁解している『論語講義』の後ろの方、陽貨第十七だけでもご覧いただければと思います。

では、論語の解説に参ります。

① 学而第一【4】

そうし いわ われ ひ み わが み かえりみ ひと ため はか ちゅう
曾子 曰く、吾 日に三たび吾身を 省る。人の為に謀りて 忠ならざるか。
ほうゆう まじわ しん なら つた
朋友と交りて信ならざるか。習わざるを伝えしか。

今私が中斎塾フォーラムで話していることも、私がふと口にした言葉が残り、50年、100年後にも論語を語る場が続いたら、誰かが継いで語っているのではなかろうかと思ったりします。

孔子の弟子では曾子が後継者と目され、曾子の弟子に孔子の孫がいて、さらに孫の弟子の中から孟子が出てきました。こうして孔孟の学と言われるようになるまでには、実に長い時間がかかったわけです。そういう流れを踏まえて曾子を見て下さい。

曾子は孔子より46歳若い人です。私の感覚で言えば、自分と30代前半の新卒くらいの差です。そのくらい若い世代が学びを受け継いでいく、そういう話です。

「吾日に三たび我が身を省る」曾子が言うには、この三たびは3回ではなく、何度も、という意味で、常に自分を反省するということです。

「人の為に謀りて忠ならざるか」誰に対しても真心を込めて接するのは非常に難しい、出来るようでは出来ません。それが出来るのは仁の人だけでしょう。だから孔子は“仁”と言うのでしょうか、そう考えると、私自身はとても仁とは言えないと思います。

「朋友と交りて信ならざるか」これは分かりやすいですね。友人との付き合いで、相手を騙したり、約束を破ったりしていないか、ということです。

今思い出したのですが、4、5回会って一度だけ一緒に食事した方がいます。掛け軸で読めない字があり、写真に撮って送ると、すぐ返事をくれる。そんな関係ですが、まだ一度しか食事していなかったので「またそのうち食事でも一緒にしましょう」と言ったまま、何か月も経ってしまった。これはまさに「朋友と交りて信ならざるか」で、度々そのようなことが起こります。

家内とも同じようなことがあります。「あのレストランがおいしかったよ。今度一緒に行こう」と私が言っても、たまたま機嫌が悪い時だったので、「あなたはあそこもここも『一緒に行こう』と言ったけど、まだ行っていない所がこんなにある」と言われる。よく覚えているものだと感心する半面、私は言ったそばから忘れてしまいます。そこでご飯を食べたことすら覚

えていないこともあります。結局、言ったらなるべく早く実行する事が無難だと考えておけばよろしいでしょう。

「習わざるを伝えしか」学者は、自分の解釈や学説を示すことが大事だと思っていますから、この句についても大きく二つの方向にまとめられています。

一つは、教わったことを良く復習し、自分のものとして身に付けたかどうかに重点を置く解釈です。孔先生から教わった内容を繰り返し考え、自分の中にしっかり落とし込んだかという説明をする学者は、この方向で説明します。

もう一つは、弟子達にきちんと教えたかどうかに重点を置く解釈です。教える側として、きちんと伝えたかどうかを大事だと考える人は、ここを強調した説明をしています。つまり、内容が多少自分流になっていたとしても、きちんと教えたかどうかを問うのだ、という読み方です。

このように、論語について学者一人一人が仮説を立て、自分の読み方を説明するので、実に多様な説があります。本屋に行けば、その手の本が山程並んでいます。全部読む必要はありませんが、気になる所を一箇所だけでも良いので選んでみる。例えば学而第一「三省」の部分だけでも、色々な先生の解説を読み比べてみると、実に様々な解釈があつて面白いものです。その中でなるほど、と思うものがあれば、遠慮なく取り入れれば良いのです。読み込んでいくうちに、自分の中から自然と我がものが浮かび上がってきます。その上で、新しい説を唱えればよろしいのです。

今日このような話し方をしているのは、酒井さんから珍しく“尖ります”と連絡が来たからです。ここへ歩いてくる間、酒井さんならどう考えるかな、と色々問答しながら来ました。今日は酒井さんと対話しているつもりでお話しさせて戴きました。

ここで渋澤栄一について、もう一つ付け加えておきます。「吾 日に三たび吾が身を省みる」という言葉がありますが、本人が言い残していますが、夜寝る前に今日は誰に会ったか、どんな話をしたかを何度も繰り返し、思い出してから眠るようにしていたそうです。もし夜に思い出さず寝てしまった場合は、翌朝、目覚めた時に昨夜思い出さなかつた分、昨日誰に会い、何があったのかを振り返るのだといいます。

渋澤栄一は、これを大変良いことだと考えており、家族にも行わせようと努力している、と書き残しています。「行わせている」と断言していないところは、おもしろいなあと思いました。

渋澤栄一が残した言葉を良く読んでみると、自分に都合の良いことが多く書いてあります。それに対して、口述筆記をした二松學舎教授の尾立惟高は、自分なりの考え方を示しています。

さて、論語①を今の時代に置き換えて考えてみたいと思います。

「吾 日に三たび吾身を省る」これは今こそ政治家が行うべきだと思います。政治家がこの三省を実践したら、日本の為大いに役立つでしょうし、自分が政治家であることを恥ずかしくて言えないのではないかと思います。

最近、政治家と名刺交換することが少なく、顔見知りの人とばかり話しているので、昔のように何枚舌を持っているのか聞くことがなくなりましたが、また聞いても良いかもしません。

政治家は、舌が何枚あるかわかりません。日に三たび吾身を省るようになります。舌は1枚だけにして欲しい。自分がどこで戯言を言ったか、どこで嘘をついたか、しっかり反省しなさい、ということです。

「人の為に謀りて忠ならざるか」これはやっていないですね。高市さんがサナエノミクスという言葉を作ったのは良いとして、本当に真心を込めてサナエノミクスと言っていたのか、と疑いたくなります。

「朋友と交わりて信ならざるか」これもまた、裏切ってばかりではないかと思います。今回の連立解消に幕を引いた件もそうです。面白いと思ったのは、高市さんが「連立解消は想定外」と発言したことです。前日には連立解消の話が飛び交っていたのに、想定外とは、とても思えません。

麻生さんも4~5日前から公明党との縁切り発言をしていたと朝日新聞に載っていました。また、公明党も国民民主党と組めばいいという捨て台詞を残していたそうです。

しかも国民民主党の玉木さんと高市さんは事前に打ち合わせをしており、実際、今日の新聞では公明党が離れたのだから、我々が連立する意味はないと言っています。本当によく言うものです。

今お話しすることは、全て朝日新聞に載っていた内容です。よく調べて書いてあると思います。

一方、日経新聞は、常識的な内容を常識的に書いているだけで、客観的ではあります。紹介するに値しません。連立解消、幕引きという書き方をしていて、面白みはありません。

読売新聞は、先程触れた癌発言、つまり公明党は癌だという発言に触れ、2023年に自民党が公明党へ喧嘩を売った事について書いていました。また、自民党の対応が後手に回ったとも書いており、感情がこもっていて、こうした記事を読むのは面白いものです。

文春や新潮は、連立解消の段階で差し替えて出せばいいだろうという姿勢が透けて見え、面白くもなんともないので、立ち読み程度で十分だと思いました。文藝春秋は面白い内容になるまで時間がかかるので、少し待とうと思います。

以上のように、「吾 日に三たび吾身を省る」は、メディアもよく読むべきだし、政治家には熟読してもらいたいと思います。

②陽貨第十七【25】

し いわ ただ はしため しょうじん やしな がた な これ ちか すなわ ふ そん
子 曰く、唯 女子と 小人とは 養い難しと 為す。之を近づくれば 則ち 不孫
なり。之を遠ざくれば 則ち 怨む。

孔子は「女子と小人とは養い難し」と言っています。これは素直に読めばよいでしょう。周囲の女性は一度ヒステリックになると手がつけられないし、家計を任せている奥さんがそうなったらもうどうにもならない。

同様に、小人、家で使っている男性の使用人も、怒りを抑えられずカッとなるタイプはどうにも扱いにくい。そういう人たちにお金を渡し、色々仕事をして貰っている立場からすれば、ヒステリックになった人は本当に手に負えない、という意味で読めばよいでしょう。

こういうヒステリックになりやすい人々は、近づけば無礼なことを言うし、遠ざければ恨む。まるで公明党の話に思えてきます。

2023年には自民党との間に隙間風が吹き、麻生さんが公明党幹部を癌と発言したとも報じられ、公明党が激怒したと書かれていました。さらに、公明党と太いパイプを持つ菅さんが副総裁から外され、自民党は我々に対して喧嘩を売るのかという言葉があちらこちらで聞かれるようになりました。

小人を多く抱えている公明党は自民党を恨み、今回の離脱に繋がった。最近の選挙でも公明党は落選が続き、大阪では維新に押されっぱなしで、その恨みが自民党に向かった。これがまさに「之を遠ざくれば則ち恨む」ということになるわけです。

以上が、陽貨第十七の句についての解説です。

恒例の質問

恒例の質問に移ります。もうそろそろ年も暮れます。さあ、今年一年いかがでしょう。

- 良い日が今年は続いておられる方
- 嘘はつかれなかつたし、嘘もついていないという方
- 有難うと言い続けているし、有難うと言われ続けている方
- 身体の手入れをよくやっていると思う方
- 自分磨きをよくやっていると思う方
- 昨晩寝るとき、満足感を持って寝た方

毎日を良い日にするためには、「吾 日に三たび吾が身を省みる」ことが大切です。嫌なことや困ったことが沢山あっても、その中から一つだけ良いことを見つけます。どうしても見つからなければ、道ですれ違った「綺麗な人」を思い出して眼福だったと考えれば、それだけで今日は良い日だったと言つても構いません。

夜寝るときは、嫌なことではなく、良いことだけを思い出して眠る。これが習慣になると毎日が良い日になります。今年は良い日が続いているかと聞かれて「はい、良い日です」と言えればそれで十分です。

自分が嘘をつかず、嘘をつかれたと思う相手がいれば、その人を心の中で切り離してしまえばよいのです。喧嘩をするなら心の中で徹底的にし、勝つて清々したら、それでおしまいです。

以上で前半は終了です。後半は「ありがとう」から始めましょう。休憩に入ります。

(休憩)

では後半を始めます。恒例の質問「有難う」からスタート致しましょう。有難うについて思い出した話を致します。

中斎塾フォーラムの田島監事は、三省とは少し違いますが、寝る時自分の体に向かって「有難う」を言い続けるそうです。「脳みそくんありがとう」「耳さんありがとう」「目さんありがとう」「鼻さんありがとう」といった具合に、手や足、お腹、内臓まで、思いつく限り体のあちこちを撫でながら感謝を伝えるそうです。本人は嘘をつくような人ではありませんから、真面目に取り組んでいるのでしょう。

そして朝起きると報恩感謝の気持ちで、近所の道路を箒で掃き、清めることを日課にしているそうです。ごく普通の税理士さんですが、内面では「有難うおじさん」として素晴らしい習慣を続けておられます。精神的にもとても良いことだと思います。

私は夜寝る前に、体へ「ご苦労さん」「お疲れさま」と体を手入れする習慣があります。外反母趾で足が痛む為、眠る前に外反母趾対策の運動をして腰から下を足先までしっかりと手入れをし、「今日一日ありがとう、明日も頼むぞ」と思いながらさします。手も同じように軽くさします。この手入れはぐっすり眠る為に欠かせない儀式となっています。

朝も同じで、短くて30分、長いと1時間程体の手入れをしてから動き始めます。今日も一日足がよく保ってくれた、明日も頼むよ、という気持ちは常に持っています。こうした行為を意識して行うのではなく、無意識に続けられると最高で、完全に習慣化できた証拠です。

有難うについても同じで、人に何かしてもらったら言うのはもちろん、自分からも自然に有難うが出るようになると、気持ちもスッキリし、相手との関係も良くなります。お互いに有難うを言い合える仲間が増えると、それだけで人生の質は大きく変わります。

次に体の手入れについて。今年良く出来た方はそのまま続けて、手が上がりにくい方は、夜寝る前に体を軽くさすってあげるだけでも十分です。人は寝ている間も呼吸し、心臓も動いているので、寝る前にゆっくり息を吐き、鼻から吸う呼吸を2~3回意識すると回復効果が高まります。

息を吐く時は、体の周りの空気も一緒に出ていくイメージで、吸うときは外の新鮮な空気が体に入るイメージです。これは無意識でも自然に出来るようになると、より体が整いやすくなります。道場では、立ったままや座ったままでも、この呼吸を使って体と気を整える練習をしています。

体の手入れは、若いうちから始めるのが理想です。年を重ねてからでは痛みが出てからの手入れになりがちですが、若いうちに自分流の体の手入れを無意識に出来るようになれば、非常に効果的です。

次は自分磨きです。今年良く出来た方はそのまま続け、自分磨きも意識して取り組みましょう。

次に、眠るときの満足感についてお話をします。昨晩、眠りに落ちる時、今日も良い一日だったな、満足だったな、と思って眠った方はおられますか。ここで確認したいのは、こうした感覚が無意識のうちに習慣として身についているかどうかです。昨晩、寝る時にどのような意識で眠ったか、理屈で分析する必要はありません。ふつと思い浮かぶ直感で判断すれば十分です。

この直感という感覚は、中斎塾フォーラムで紹介している「総合的直観力」に関係します。総合的直観力とは、無意識のうちにふつと思ひ浮かぶひらめきや、第六感のような感覚のことです。日本語では表現がいくつもありますが、自然に浮かんでくる直感のことです。

例えば、結婚していない方の場合、男女が初めて出会った時「この人と結婚するかもしれない」とふと思うことがあるようです。実際に結婚するかどうかは別ですが、こうした直感を持つ人は意外と多いものです。

そのような人を何人も知っていますが、一番極端だったのは、学生時代、昼間知り合ったばかりの女性をそのまま口説き、知り合ってその日の内に結婚まで進んだ友人がいました。偶然の連続でしたが、ふと思ったことが現実につながった例です。

このように、ふと思ったことが実現することがあります。総合的直観力とは、こうしたひらめきや勘を単なる偶然で終わらせず、経験や努力によって整理し、活かす力です。何かハッと思ったとき、それを理論や知識と結びつけることで、直感がより確かなものになります。

单なるひらめきや第六感も、このように積み重ねて磨くことで実力に変えることができます。実際、愚直に追求し続けることで、ノーベル賞につながる例もあります。今回はノーベル賞が日本から2人出来ましたね。

直観力を信じ、調べて分析し、また調べていくことで、成果に繋がっていきます。但し、これは何十年もかかる方法です。その長い過程で、直観力を信じて進める際、人為的にプラスアルファを加えるなら、総合力をつけることが重要です。これは木内信胤先生の説明でもあり、先生は総合的直観力という言葉を使っておられました。

第六感やパッとひらめく感覚は大切にして下さい。そしてなぜひらめいたのかを追いかけていくと、自由に出てくるようになります。ひらめきは無意識のうちに浮かぶものですが、それを意図的に引き出す方法が、総合的直観力の中にあります。眠るときの満足感は、その入り口になります。眠る前に満足感を持つことで、直観力も自然に磨かれるのです。今日は恒例の質問について、長い話を致しました。

令和7年を考える

改めて今年は挑戦の年とお伝えしましたが、皆さんは何かに挑戦しましたか。自分でこれにぶつかろうと思ったことはあったでしょうか。現時点ではまだ数か月ありますので、日常生活の中で根底から自分を揺さぶるような挑戦をしてみると良いでしょう。思わぬ成果や気づきが出てくると思います。

挑戦の年、私は近いうちに動乱が起きると予想しています。動乱とは、経済破綻等の社会的混乱です。高市さんは経済に不慣れであり、経済の舵取りを自信満々で行なうことは非常に危険です。物価は上がり続け、給料の実質的な価値は減少しています。現時点では、付け焼き刃的な対応や、小手先の策で経済を運営している状態です。

目先だけ給料を上げるという流れを作ろうとしているので、サラリーマンの給料が上がる人は上がりますが、上がらない人のほうが圧倒的に多いのが現状です。高市さんが総理になり、日銀が金利を上げるなどの政策を行えば、自ら経済を悪化させる可能性があります。このような複合的な影響で、経済破綻が起きると考えています。だからこそ、前もって食料確保や自助努力をしておくことが重要です。評論家や個人でも言われていることです。

判断の三原則

1. 税金の仕組みはこれでよいのか。

決して良いとは言えません。税金だけは何が何でも徴収する体制になっています。税金を取られて困っている人からも当然取りますし、今後さらに多くの税金が、知らない間に取られていくでしょう。

2. なぜ日本は弱体化したのか。

それは、政治家の能力不足が直接原因です。今回の事例でも、政治家の不適切な状況が明確になりました。もはや、政治家で素晴らしい人はいないでしょう。

3. 食べるもののが無くなる日は来るか。

食べ物が不足する日は当然来るでしょう。いつ来るか、というだけの話ですから、食料を自給自足できる体制を整えておくことが不可欠です。

シムックスではフレコンバッグを活用することで、比較的多くの食料を確保できるようになってきています。具体的な方法については、いずれご紹介する予定です。

4. 日本は戦争に巻き込まれるか。

当然巻き込まれると思います。

5. 少子高齢化のもたらすものは何か。

以前からお伝えしている通り、このままでは日本の存続 자체が危ぶまれる状況になります。

私が気にしているのは、日本は自然災害で国としてひっくり返る可能性があります。また財政破綻が起きれば、国民が直撃を受けるでしょう。

メディアの情報を鵜呑みにせず、自分自身の眼力と判断基準を持つことが重要です。自分の判断基準を基に社会の動きに予兆を感じたら、直感を頼りに行動を変える必要があります。その日が近づいていると私は考えています。どうぞ、しっかりと準備をして頑張って下さい。

以上で本日の講話を終わります。有難う御座居ました。